

大津 歴博 だより

2008
No.72

企画展（源氏物語千年紀 in 湖都大津）

石山寺と湖南の仏像

— 近江と南都を結ぶ仏の道 —

平成20年7月13日(日)～8月24日(日)

重要文化財

銅造観音菩薩立像

奈良時代

木造如意輪観音半跏像胎内仏4軀のうち

石山寺蔵



大津市歴史博物館

「石山寺と湖南の仏像」

— 近江と南都を結ぶ仏の道 —

大津市の南郊を流れる瀬田川は、古来より都（飛鳥・奈良）と近江をつなぐ大動脈として認識されてきました。藤原京や平城京、東大寺などを建立するにあたり、田上、大石や信楽、高島など近江の材木をこの川により輸送したことは有名です。また、小浜や敦賀などに到着した日本海側の人や物、そして仏教文化は、琵琶湖を経由して瀬田川もしくは宇治田原を通る「田原道（東山道か）」、そして奈良街道などにより、都へ運ばれていきました。

そしてこれらのルートは、都の最新の仏教を近江にもたらす道でもありました。奈良時代には、岩間山や比良山系、金勝山、湖北の己高山など、近江の山岳仏教は、南都の僧により開発が進められ、各地で寺院が建立されました。そして何よりも、田上山や大石の開発と関連して、造東大寺司により石山院（石山寺）が創建され、また瀬田地域に国府や国分寺などが造られ、さらには保良宮や禾津願宮などの宮が造られるなど、奈良の都の文化が直接この地に花開いたのです。

このように石山寺を中心とした膳所、石山、瀬田、田上、大石、宇治田原町などの瀬田川（宇治川）、木津川流域、そして田原道沿道の湖南地域は、近江と大和（南都）を文化的につなぐ道として重要な役割を担っていたのであり、この地域は近江の仏教史を考えるうえで重要なキーワードを多く孕ませています。現在、その栄枯盛衰の長い歴史のなかで、往時の繁栄を示すものは多く失われてしまいましたが、それでもなお、地域の深い信仰により大事に守られてきた文化財、特に仏像が多く伝来しています。

本展では、このように日本仏教の重要な地域の一つであるこの地にスポットを当て、今は忘れ去られている近江と南都の親密な交流を、現存する仏像をとおして辿ろうとします。

一、石山寺の諸像



重要文化財 木造大日如来坐像
快慶作 鎌倉時代 石山寺蔵



重要文化財 銅造如来立像
飛鳥時代 石山寺蔵

二、湖南地域の仏像



大津市指定文化財 木造阿弥陀如来立像
平安時代 月輪・新福寺



木造四天王立像（持国天）
平安時代 大石・若王寺蔵

三、瀬田川流域・田原道周辺の仏像



城陽市指定文化財 木造阿弥陀如来立像
平安時代 城陽市・長光寺蔵



重要文化財 木造四天王立像（増長天）
平安時代 宇治田原町・禪定寺蔵

会 期：平成二〇年七月十三日(日)～八月二十四日(日)

休 館 日：七月十四日・二十二日・二十八日、八月四日・十一日・十八日

会 場：大津市歴史博物館二階 企画展示室A

観 覧 料：一般 六〇〇円(四八〇)、高大 五〇〇円(四〇〇)

小 中 二〇〇円(一六〇)

(一)は十五名様以上の団体、大津市内在住の六五歳以上の方、大津市内在住の障害者の方

主 催：大津市・大津市教育委員会・大津市歴史博物館・京都新聞社

後 援：BBCびわ湖放送・KBS京都・NHK大津放送局・エフエム滋賀

協 力：びわ湖大津観光協会

源氏物語千年紀 in 湖都大津 実行委員会

関連講座

■ 七月十九日(土) 「南山城の仏像と石山寺」

伊東史朗氏(元文化庁主任文化財調査官
・京都国立博物館名誉館員)

■ 八月二日(土) 「石山寺と古代の仏像」

井上一稔氏(同志社大学文学部教授)

■ 八月九日(土) 「石山寺の塑像彩色の背景について」

百橋明穂氏(神戸大学文学部教授)

■ 八月十六日(土) 「涅槃図を読み解く―石山寺所蔵仏涅槃図について―」

古谷 優子氏(北九州市立自然史・歴史博物館学芸員)

■ 八月二十三日(土) 「近江の仏像の道―陸と湖と山の道―」

寺島典人(当館学芸員)

三企画展

「紫式部と近江八景・石山秋月」

会 期 平成二〇年九月三日(火)～十月二六日(日)

紫式部は、中宮(上東門院)彰子から、「宇津保物語」や「竹取物語」といった古い物語ではなく、新しい物語を創作せよと所望され、石山寺本堂に七日間籠もり、「源氏物語」の着想を得たと伝えられています。難産した式部を救ったのは、石山寺から眺めた湖面に映る中秋の名月でした。このエピソードは、鎌倉時代後期とされる『石山寺絵詞』や『石山寺縁起』第四卷冒頭詞書にすで見出され、南北朝時代の『源氏大鏡』や『河海抄』などにも見る事ができます。『源氏大鏡』では「折り節八月十五夜の月湖水にうつりて、心澄みわたりたるまに、物語の風情空にうかがけるを書きはじめて・・」とあります。本展では、紫式部伝説と、その伝説なくしては成立しえなかった近江八景の石山秋月をとりあげ、近江八景・石山秋月にみる紫式部の美術作品を紹介いたします。



三代歌川広重 近江八景全図石山より見る 本館蔵

青嶋寺と龍音寺の阿弥陀兄弟仏

大津市南部の瀬田川流域、田原原道（旧東山道か）沿いは、古代の主要幹線道であり、飛鳥や大和の都から東国や北陸へ向かう北の玄関口でもあったことから実に多くの寺社が造営されました。現在、そのほとんどが廃れたとはいえ、多くの仏像が残されています。

今回は、まさにこの仏像ルートに沿ってほぼ南北に八キロの距離である瀬田の青嶋寺と大石龍門の龍音寺に、たいへんよく似た平安中期十世紀の阿弥陀如来坐像がそれぞれ伝来していることが企画展準備調査で判明しましたので紹介します。



まず、瀬田の青嶋寺は、「瀬田の唐橋（瀬田橋）」の東すぐ北に位置する天台眞盛宗寺院です。この地はかつて近江国庁のあった地で、近江国の政治の中心地でした。まさに瀬田川のと元に位置し、かつては瀬田津が付近にあったと想像されます。また、古代の東山道がここから東に向かい、東国に向かう出発地点でもあります。さらに大津宮時代や平安京以降は、東海道と東山道が瀬田橋を渡るところでもありました。まさに交通のT字路、琵琶湖の水運を考えると十字路という場所です。一方の大石龍門の龍音寺は浄土宗寺院です。龍門は、田原原道を宇治田原から禪定寺峠を越えて大津に入ってまもなくのところにあり、元暦元年（一一八四）には近江の著名な名勝地として名が残っています。まさに山城国から近江国に入ってすぐの開けた場所です。そしてその道はそのまま瀬田橋まで続いているのです。

さて、本題の仏像を見ていきます。

龍音寺像はほぼ当初の彫刻面を味わうことが出来るのですが、青嶋寺像は江戸時代に表面が修理され、厚めの後補彩色で覆われているため、本来の彫刻面を伺うことは難しいものの、それでも形状と形式は十分みる事ができます。形状は両像ともほぼ同じなのですが、唯一違うのが足の組み方です。青嶋寺像は左足を上にして結跏趺坐しているのに対して、龍音寺像は右足を上にしています。あとは通常の阿弥陀如来の坐像と一緒に



大石龍門・龍音寺像側面



瀬田・青嶋寺像側面(角度補正)

さらに細かく見ていきましょう。両像とも、肉髻（頭頂の隆起）と地髪部の差は穏やかでなだらかにみえます。面相部は丸く、額が広めなのが特徴的です。袈裟の懸け方が同じで、そこから現われる肉身の形も一緒です。袈裟が右肩に懸かる部分に正面から二条みえる衣文の形、首の周りを少し折り返してゆったりするところ、右脇から袈裟を斜めに懸けている時、端を折り返しながらかも、しかも、右胸下でたくしを表すところ、両足のふくらはぎから脛にかけてU字に数条衣文を表し、しかも両膝先では全く表さないなどという両足の衣文の表し方まで同じです。

正面だけではありません。側面から見ても、螺髪（髪）の付き方、耳の形、膝の太い部分だけ衣文を彫らず、腰と膝に表れる衣文の形も似ています。何よりも全体的なシルエットも近似しています。龍音寺像の、背中を後に引いて腹を出す姿勢も特徴的なのですが、青嶠寺像にはややそれを感じられないかもしれません。じつは、江戸時代の修理の際、三センチほどお尻の部分を高くしているのです。それはより礼拝者の方を向くべくされた後世の細工であり当初の姿ではありません。それを差し引いてみると、横の姿勢もそっくりなものです（五頁挿図）。像底の形もよく似ているのもいうまでもありません。

最後に大きさを見てみましょう。青嶠寺が五三・七センチで、龍音寺像は五〇・三センチ。先に述べたお尻の下駄の分を引けば、四ミリの違い、これはほとんど測定誤差の範囲内で、同じ高さといってもいいでしょう。まさに双子のようにそっくりな仏像なのです。

両像の発見により、瀬田と大石の仏像の道が、十世紀に太くつながっていることが実例によってわかったのです。

（学芸員 寺島典人）

※両像とも企画展に出陳しますが、展示期間に注意してください。



大石龍門・龍音寺像
展示期間は7月31日まで



瀬田・青嶠寺像
展示期間は7月24日まで

大津歴博だより No.72
平成20年6月19日

大津市歴史博物館
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>